

「終わった私の反こう期」

田邊 璃奈

「ごめんね。夏休みの計画が立てられんね。」

乳ガン検しんをうけた母は再検さになった。近くの大きな病院に再検さをうけにいった日の母の一言に私は泣きそうになった。

再検さをしたら、ガンかどうか分からないものがあつたらしい。その分からないものを注射器でとって検さに出したそうさ。結果がでるのは十日後。

「きつと大丈夫。」

と父。私も、

「お母さんならガンがにげるばい。」

強がってはみたけれど、やっぱり泣きそうだった。

その日から、母は食よくがなくなり、けいたいを見るのがふえた。きつと、乳ガンについて調べているんだ。何事もなかったかのように必死に笑ったりしているけれど、やっぱりいともとちがう。

今まで生きてきて一番長い十日間だ。

ある日、父は仕事から、私は市のイベントから帰宅。

「きのう病院から結果を聞きに来て下さいって電話あつたから今日行ってきた。」
と母。父も私もパニック。

「何で言わんかったん？ 一緒について行くち言ったやん。」

と父。聞きたいけれど聞けない一言。

「どうやった？」

口をひらいたのは父だった。

「大丈夫やった。ガンじゃないつて。」

全身の力がぬけるつて、これかと思いました。人間つて、本當にうれしい時はすぐに声が出ないことを知った。

「明日結果をききに行くち言ったら、亮さんは仕事か手につかんし璃奈はせっかくのイベントを楽しめんくなるやろうち思ってたけん。ごめんね。一人で行って。」

父もすごく安心していた。父と母が話している時、母のうでのアザときずに気付いた。指のあとだ。とくに左うではひどい。きつと、あの広い待ち合い室で検査結果を待っている間、不安で不安でうでをつかんだんだと思つた。いつもきれいにぬつているネイルは先がはげている。

そのアザを見たしゅん間、私の短い反こう期は終わった。どうでもいい事ですぐ反こうしていた私。いやな事があるとすぐ顔に出す私。ごめんね。と何度も思つた。そして元氣でいてくれたことに感しやした。

「これだれ？ 使つたら元にもどしてよ。」

今日も母のどなり声…いや元氣な声か家にひびいている。父と顔を見合わせ、

「幸せだね。」

「だね。」

と笑つた。